

新生活には少し慣れてきたころでしょうか?今回は川崎病のお話です。

川崎病とは

1967年に川崎富作先生が報告した疾患です。MCLS(急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群)と呼ばれていましたが、現在では「川崎病」という呼び方が一般的になっています。主に4歳以下の乳幼児に好発する熱性疾患で、**中位の太さの血管、特に心臓を養う冠動脈(かんどうみゃく)という血管に炎症を起こし、まれですが心筋梗塞を起こすことがあります。**現在では免疫グロブリンの治療が一般的になり、心臓の合併症はかなり減少しました。なんと発見から50年たった今でも病気の原因は不明のままです。

川崎病の症状



1 5日以上続く発熱

2 急性期に手足の硬いむくみや赤み、回復期に指先の皮むけ

3 体全体に大きなさや形が一定しない発疹



4 両眼の赤み

5 口唇・舌・口の中の赤み

6 首のリンパ節の腫れ

主要症状には含まれませんが、BCG接種部位の発赤・痂皮形成が見られることがあります。

6つの大症状のうち5つがみられるか、4つでも検査で心臓の異常が見つかる川崎病と診断されます。

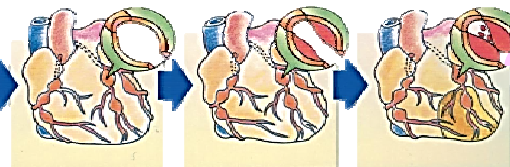
検査は??

血液検査で、炎症反応高値や肝機能障害がみられることがありますが、川崎病の決め手になるような検査はありません。他に合併症確認のため、レントゲン、心臓の超音波(エコー)などを行います。

冠動脈炎

合併症について

川崎病は、全身の血管に影響を及ぼすなど、いろいろな合併症が起こりやすい全身性の病気です。中でも最も注意が必要なのは**心臓の血管(冠動脈)の炎症**です。これにより、**冠動脈瘤(りゅう)**ができることがあります。



冠動脈(心臓の太い血管)がコブ(瘤)のように膨らむ

血液のかたまり(血栓)ができやすくなる

血栓が血管につまると心筋梗塞のような状態になる

冠動脈瘤は小さいものも含めるとは5~10人に1人の割合で見つかります。大きなものは後遺症として残ってしまうことがあります。

後遺症を残さないための治療が最も重要になります。

治療のポイント

症状は一度に出現するわけではないため、初期は風邪と診断されることがあります。発熱して3-5日目頃に診断されることが多いのですが、7日以内に治療を開始することで合併症を抑えることができます。治療は入院の上、**免疫グロブリン大量療法、アスピリンの内服(炎症を抑える、血栓予防)**です。しかし、治療に反応しないこともあり、ステロイドや血漿交換が行われることもあります。回復後も1~3か月程度アスピリンを内服します。以後、合併症がない場合でも、数年は外来で心臓の経過をみていく必要があります。

今月の絵本

ともだち くるかな

内田麟太郎 作
降矢はな 絵

オオカミとキツネの友情のお話
一緒に泣いて笑って、心を通わせる、友達を大切にしようと思う一冊です。
友達は一生の宝物ですね♡



おしらせ

5/9(火) 14~16時まで、**そらいろこどもまつり**です!!
皆さんに楽しんでもらえるとうれしいなあ♪

小学校は運動会の時期ですね!!
天気が良くなるといいですね(^◇^)



次回もおたのしみに~